

ソ系接続表現の変遷

大久保 歩 美

本論文は「ソレデ」と「ソコデ」というソ系指示詞を構成素に含む形式が、〔指示代名詞+デ〕という2語から、ひとまとまりの1語に近い用法で用いられるようになるという考えのもとに、これらの歴史の変遷を追ったものである。「ソレデ」「ソコデ」という意味的、形態的に類似性のある二つの表現の変遷を、会話文を中心に考察した上で、近世から近代にかけてこれらが対照的な変遷過程を辿った原因を、それぞれの使用場面や位相という観点から考察する。

第1章 先行研究及び本論文の立場と考察対象

1.1. 本論文における立場

本論文では、「ソレ」「ソコ」という指示詞及び「デ」の形式化という点に着目して考察を進める。また、田中章夫（1984）などが明らかにするように、接続詞の使用は文体と大きく関わるので、調査対象資料もこの点に注意し、主に会話文を対象とする。

1.2. 指示詞及び「デ」の変遷と本論文の考察対象

はじめに「ソレデ」「ソコデ」の構成素である指示詞は、中世以降どのような対象を指し示す語であったのかを確認する。

李長波（2002）によれば、上代における「ソレ」は先行文脈における物的対象を指示することが多いものの、中古以降にそのような偏りは見られないという。これに対し上代で事柄などを指示していた「ソコ」は、中古以降は場所や人を指示する用法に偏って用いられていた。

このことからすれば、「ソレ」は中古以降事柄指示の用法を一貫して有しており、対象時期の「ソレデ」が節以上の内容を受けるからといって、接続表現としての形式化が進行していると考えすることはできない。一方「ソコデ」は「ソコ」の指示対象が名詞句であることが基本のため、「ソコデ」が節以上の内容を受けようにならなければ、接続表現化が進行していると認められる。

したがって《第2章「ソレデ」の変遷》では、①現場の対象や文脈上の名詞句を指示する用法からそれ以上の単位を受けようになる変化については考察の対象とせず、②指示対象が不明である用法、つまり構成語個々の実質的な意味が失われた用法への変化を考察の対象とし、《第3章「ソコデ」の変遷》では、①②両方の変化に注目して考察を行うことにした。

また、格助詞「デ」が広く用いられるようになるのは室町期以降と考えられるため、本論文の研究対象時期は室町期以降とした。

第2章 「ソレデ」の変遷

本章では「ソレデ」について、〔ソレ+デ〕の語構成が認められる用法から、それが認められなくな

る〈添加・転換〉用法の生じる過程を追った。その結果、近世期には〈添加・転換〉用法の確例は見られないものの、明治前期には僅かながらその用例が見られ、後期にはさらに増加することがわかった。

また現代では、京阪語において「ホンデ」などの異語形があらわれるが、それが用いられる場合は〈添加・転換〉用法であることが多いことも明らかになった。

さらに「ソレデ」の使用傾向としては、〈事態発生要因〉を表す用法が減少し、〈状態・次第〉を表す用法が安定的に用いられるようになることもわかった。

2.1. 現代語における「ソレデ」と〈添加・転換〉用法

有賀千佳子(1993)などの先行研究によれば、現代語における「ソレデ」は、主に〈順接〉型、〈添加〉型の2種類に分けることができるという。〈順接〉の「ソレデ」は構成素が固有の意味を残すが、〈添加〉の「ソレデ」はもはや構成素に還元できないものと考えられる。本論文ではこのような用法を〈添加・転換〉用法とする。

2.2. 調査結果

2.2.1. 〈添加・転換〉用法の成立と拡大

京阪語、東京語（共通語）ともに、近代になって初めて「ソコデ」に〈添加・転換〉用法があらわれる。そして明治前期から明治後期・大正期、現代へと〈添加・転換〉用法が多用されていく様子もみられた。

2.2.2. 異語形との相関性

語形と〈添加・転換〉用法との相関関係も明らかになった。現代語資料では京阪語に異語形の割合が高く、東京語（共通語）に基本語形の割合が高いが、いずれも〈添加・転換〉用法に異語形のあらわれやすいことは共通している。

2.2.3. 〈事態発生要因〉表示と〈状態・次第〉表示の割合

〈添加・転換〉以外の用法は、〈事態発生要因〉表示の用法と〈状態・次第〉表示の用法に分けることができる。そして近代以降、前者は減少するのに対して後者は増加する。〈添加・転換〉用法成立の背景には、〈状態・次第〉表示の用法の拡大が並行していたものと考えられる。

第3章 「ソコデ」の変遷

本章では「ソコデ」が場所（場面）指示中心の用法から原因・理由を表す〈脱事態〉用法を定着させる流れを追い、続いて〈添加・転換〉用法の消長について考察する。

3.1. 現代語における「ソコデ」と〈添加・転換〉用法

ひけひろし(1986)、甲田直美(2001)などによれば、現代語の「ソコデ」は、前件の〈状況〉や〈場面〉が後件を述べる前提としてあり、そこに〈原因・理由—結果・結論〉に類する条件的な関係をかたちづくとされる。

それに対して、近世後期江戸語における次のような例は、先行文脈のどの部分を受けて用いられたものかわからない。これは〈添加・転換〉用法といえる。

出目「…野呂公心置なくはなしねへ。野呂「よし〜サア洒落らばしやれる翌日^{あした}の小遣だぞ。そこ

でまづ大びらにずつと向島に。「フン引それから。

(『花暦八笑人』)

3.2. 調査結果

3.2.1. 〈脱事態〉用法の拡大

「ソコデ」は18世紀まで具体的な場所・場面指示の用法がほとんどであったが、19世紀以降は一般性のある事柄等を前件として原因・理由を表す〈脱事態〉用法の定着したことが明らかになった。

3.2.2. 〈添加・転換〉用法の拡大と縮小

近世期には〈脱事態〉用法が広く用いられる一方で、近世後期江戸語、近代東京語において〈添加・転換〉用法が用いられている。しかし近代東京語における使用割合は近世後期江戸語よりも小さく、現代語資料にいたっては全く見られなくなる。

第4章 「ソコデ」の〈添加・転換〉用法衰退の原因

本章では〈添加・転換〉用法が近代以降拡大の一途をたどる「ソレデ」に対し、「ソコデ」においては衰退傾向にあることの原因について、使用場面の变化という観点から考察する。

京極興一・松井栄一(1973)によれば、近代の小説等において「ソコデ」は地の文中心に用いられるが、「ソレデ」は特にそのような傾向がみられないという。近世期においては専ら会話文に用いられていた「ソコデ」が近代以降地の文中心に用いられるようになり、〈添加・転換〉用法を失ったことには、次のことと関わりがあると考えられる。

- (1) 中世から近世期の講義の場において「ソコデ」が多用されていたこと
- (2) 「ソコデ」がある種の「かたさ」を持った表現として捉えられていたこと
(そのために近世期以前においても使用する話者に偏りがあったこと)

4.1. 一対多の場面における使用

上記(1)については、京極・松井や本論文によって、抄物や道話等に「ソコデ」の多用されることが明らかになった。森岡健二(1980)では「抄物→江戸講義物→明治講義物→演説→標準語」という中立的口語を用いる場の連続線が想定されているが、講義の場で多用されていた「ソコデ」は、明治期以降言文一致体の成立に影響を与えた演説においても多用され、文章語的な文体と親和性の高い表現であったと考えられる。

4.2. 話者の性差

しかし演説資料においては「ソレデ」を含む他のソ系接続表現も同様に広く用いられており、この結果から「ソコデ」のみが「かたさ」を持った表現であったとは考えにくい。そこで話者の性差に着目したところ、近世期において「ソコデ」は女性が用いることの少ない表現であり、その傾向は近代に入っても変わらないことがわかった。

講義の場で用いられる点と、男性に使用が偏るという点は近世においても同様であったはずであるが、近世では地の文が文語的なカク、サ、シカ系の接続表現に偏っていたため、「ソコデ」の相対的なあらたまり度はさほど高いものではなかった。ところが近代以降は言文一致体(口語体)の成立により、書きことばにおいてカク、サ、シカ系が減少し、「ソコデ」を含むソ系の接続表現も用いられるようになっ

たために、「ソコデ」のあらたまり度は上がり、結果として日常の話しことばにおいては用いられにくくなっていったと考えられる。

おわりに

本論文では、会話文における「ソレデ」と「ソコデ」という二つの表現の歴史的記述を通し、ソ系接続表現の歴史の一端を明らかにした。しかし会話資料に限定したため、語りの文（地の文）を含めた考察を行うことができず、〈添加・転換〉用法の成立やそれを拡大させた原因について深く考察することができなかった。また、「ソレデ」「ソコデ」は近代以降に対照的な変遷を辿ったが、意味的・形態的に類似したこれらの表現が相互に与えた影響について考察することも残された問題である。

しかし、言文一致体の成立という問題を含む文体的側面と接続表現の用法変化との関連について論じたことや、類似した表現の対照的な変化による相互の影響関係の可能性など、接続表現の史的展開について多少なりとも新たな知見を示すことができたと思う。

〈引用文献〉

- 有賀千佳子（1993）「対話における接続詞の機能について—「それで」の用法を手がかりに—」『日本語教育』73 89-101.
- 京極興一・松井栄一（1973）「接続詞の変遷」『品詞別日本文法講座6 接続詞・感動詞』明治書院
- 甲田直美（2001）『談話・テキストの展開のメカニズム』風間書房
- 田中章夫（1984）「接続詞の諸問題—その成立と機能—」『研究資料日本文法4』明治書院 82-123.
- ひげひろし（1986）「接続詞「そこで」「それで」」『教育国語』86 74-88.
- 森岡健二（1980）「口語史における心学道話の位置」『国語学』123 21-34.
- 李長波（2002）『日本語指示体系の歴史』京都大学学術出版会

平安末期小私家集の研究

穴井 潤

本論は平安末期の私家集の研究である。小私家集とは、歌数の少ない小規模な家集の便宜上の呼称である。小私家集が同時期にいくつも編まれたことは、夙に松野陽一や井上宗雄が指摘しているが、概して大規模家集の抄出本ないし撰集資料と認識されていた。

しかし、同時代にいくつも編纂されたのは、小私家集を編もうとする欲求や要請があったからだと考えられる。そこで本論では、個々の作品の検討を行うことによって、平安末期における小私家集編纂の意図を明らかにすることを目的とした。

第一章「『保延のころほひ』再考」では、従来通説であった「千載集の増補資料」とする松野説に対して、作品の再検討を試みた。

『保延のころほひ』（以下、本集）は少ない歌数ながらも部類歌集の形で整えられた家集である。収載歌は歌順まで含めては『俊成家集』と一致しているが、中には『長秋詠藻』入集歌も採られていることから、単純に『俊成家集』から抄出したとは言えない。装訂は卷子本であり、原典に近い形で残されている蓋然性が高い。

詞書は俊成自撰の他作品に比して対者敬語が多く用いられており、他者に見せることを前提として編まれたと考えられる。また、詠作状況が他作品と異なるものもあり、本集独自の文脈の中で歌が読まれるように意図された記述になっている。

詞書中に現れるのは俊成の実人生に関わる人物で、とりわけ甥である実定と近い関係であったことを示す構成となっている。また、詞書の記述は、出家し撰集を終えた後の時点から過去を振り返るような書き方であり、人生を回想しているように記されている。

収載歌は、部立にかかわらず述懐性の強い歌が採られている。総歌数の約半分を述懐的な歌が占めており、作品全体に述懐性を付与しようとする意図が窺われる。巻頭・巻軸歌共に述懐歌であることもそれを補強する。その中には、家意識や後世の自分の評価に対する述懐歌も含まれており、自身の不遇感によって詠まれた歌が見られる。

以上のことから、本集は『千載集』の増補資料とは考えがたく、独立した自撰家集と考えた。本集の特徴は、『千載集』編纂時までの俊成の個人史を簡潔にまとめたところであり、それまでの人生を作品として再構成した「自伝的家集」だと結論づけた。

第二章「流布本『平忠盛集』伝本・本文考」では、流布本『平忠盛集』（以下、流布本）の本文として用いられている神宮文庫本とは異なる二つの伝本（以下、尊経閣本・河野I本）を紹介し、新たに伝本を区分すると共に、異本との本文上の差異について論じた。

従来、流布本研究には神宮文庫本本文が用いられてきたため、(A)部類歌二九首、(B)見勅撰歌九首からなる家集と捉えられてきたが、(A)のみからなる尊経閣本、(A)(C)（類題集からの追補）からなる河野I本を合わせて考える時、(A)のみが本来の流布本本文であり、(B)と(C)は後人の手による増補であると再区分した。

また神宮文庫本本文には誤写と思しき異同が見られるので良質な本文では言いたいこと、諸伝本では判読できない箇所が尊経閣本系統の本文では読めることにより、尊経閣本が最も良質な本文を持つことを論証した。

さらに尊経閣本は独自の奥書を有することから、寛文八年十月晦日に為

家筆本を書写したことがわかる。本文は定家仮名遣いに準じた表記がなされておき、為家が定家仮名遣いに忠実であったことを加味すれば、奥書の信憑性は高いといえる。

異本との異同に関しては、流布本収載歌の大部分は異本に重出するが、様々な相違点が存する。とりわけ、異本『久安百首』歌群の収載歌との間には歌意に関わる異同がある。

流布本・異本のそれぞれの『久安百首』歌を比較し、表現の差異について考察したところ、詞書中の状況が一致せず、流布本中の『久安百首』歌が異本『久安百首』歌群の中には見られないという違いがあった。加えて、重出歌の中には誤写とは考えがたい異同があることなどから、忠盛は既存の歌を手直しして『久安百首』に再利用したと推測し、流布本収載歌は『久安百首』詠進以前の草稿段階の面影を残していると結論づけた。

第三章「流布本『平忠盛集』考」では、流布本の作品としての特徴を検討した。

家集の構成は、ややバランスを欠いているが、四季・恋・雑と部類歌集の形でまとめられている。また、巻頭歌に崇徳院から『久安百首』詠進を下命された際の歌を、巻軸歌に白河院が崩御した際の歌を配している。これは、崇徳院によって『久安百首』作者に選ばれるという名譽と、上流貴族への道を開いた白河院を悼む思いを表出させた配列であり、両院からの寵愛を受ける忠盛像を描こうとする編纂意識が窺われる。

詞書中の登場人物は、そのほとんどが保元の乱敗者方の関係者である。忠盛が最も恩恵を受けた鳥羽院に触れていないことと関連して、白河・崇徳両院との関係性を強調した人物選定となっており、流布本享受者は白河・崇徳両院と関係の深い人物と想定できる。

収載歌には、受領国と京を行き来する際に詠まれた歌が採られている。複数回登場する播磨・備前は受領国としては大国であり、とくに播磨は非

参議三位への昇進ルートと認知されていたため、参議を目前にしていた忠盛の姿を描くために、受領国が詞書中に登場したと考えた。こうした羈旅歌には、異本と比較すると情報の取捨選択が行われていることがわかり、格の高い受領国に任じられたことを強調する意図があったと考えられる。

家集としての特徴は、忠盛が白河・崇徳両院の寵愛を受け、大国である受領国を任されながら両院の関係者と交流していく姿を想起させるものとなっている点にある。『久安百首』について触れていることから、忠盛最晩年のころの歌まで収載されていることがわかる。巻軸に白河院崩御の際の歌を配しているのは、親子二代を寵愛し侍層から引き上げてくれた白河院への忠心の表れとして象徴的である。

第四章「『入道大納言資賢集』考」は、従来「寿永百首家集」か否かという議論が起こっていた『資賢集』（以下、本集）について考察した。

本集は部類歌集というには特殊な構成となっているが、収載歌は四季・雑に大別でき、雑部も一定の法則で並んでいるため、未整理なのではなく整序された構成と判断できる。

四季部は春歌が少なく秋歌が多い。秋歌では常套的でない景物も採られており、宗教的なモチーフを題材にした歌も看取される。

資賢の生涯は波瀾万丈なものであったが、本集雑部にはそうした個人史の影響によってか述懐性が顕著に表れている。家集が編纂されたのは、出家日と奥書の記述によって、七月十二日～八月六日までの一ヶ月間と推定できる。

本集には三人の人物との贈答歌が入っているが、源頼政との贈答は以仁王の乱と関わって注目される。当該贈答は資賢の籠居している半年間に交されたものだが、不審な点が多い。贈歌と返歌の内容が噛み合っておらず、贈歌を撰取して返歌するという贈答歌の傾向から考えると、家集編纂に当たって贈答歌が分断された可能性がある。また、頼政の返歌には乱を匂わ

せる表現が用いられており、本集が頼政の死の二年後に編まれたことを加味すれば、当該贈答は頼政の決起を暗示するものと考えられる。

こうした贈答歌には清盛による関外追放に対しての不遇感が表出している。しかし、出家の直後に編まれた家集に、頼政の死を暗示する表現や通家の遠忌について記していることは不遇感だけでは説明しきれず、故人を偲ぶ無常感も表出していると考えられる。

他の収載歌についても、月と関わる宗教的表現が多く見られ、春・秋・冬歌に恋歌的な表現を用いながら孤独な境遇について詠んだ歌が配されている。こうした述懐性を作品の中に表出させることができるのは、不遇の只中においてではなく、出家を遂げた後に自分の人生を振り返り客観視したことによると結論づけた。

終章ではこれまで三集を考察してきた中で共通してみられる特徴についてまとめた。

家集の構成に雑纂形式のものではなく、いずれも整序された形で編纂されていた。これは少ない歌数故に大部の家集より構成に気を配ることが容易であり、和歌を専門としない人物でも整えることが可能であったと考えられる。また、いずれの家集も他出と比較すると詞書に改変が加えられており、読解に編者のバイアスがかけられていた。

収載歌には、部立にかかわらずある種のイメージを喚起させる表現が見られ、家集を通読する時、人生のある時点から自分の来し方を回想する姿勢がその構成から看取される。

以上より、小私家集とは、たとえ専門的な歌人でなくともその小ささ故に、自身で歌を取捨選択して整然と構成し、伝えたいテーマを打ち出して編纂することが可能な形態の私家集であると結論づけた。人生の節目において小規模な家集を編むということは、その時点までの自分を客観視し作品化するという行為であるといえる。

国分青厓の基礎的研究

松葉友惟

日本の漢詩史を語る上で、おそらく最後に語られるであろう人物が国分青厓（一八五七・一九四四）その人である。明治時代に新聞『東京電報』や『日本』などの「評林」欄に時事批評の漢詩（以後「評林詩」と称することとする）を連載したことで人気を博したほか、明治を知る多くの漢詩人たちが世を去った後も、昭和二十一年にその生を閉じるまで日本の漢詩壇を牽引し続けた人物である。しかし、この人物の現代における知名度はとても低く、さらには近代文学研究の中で漢詩文というジャンルがほぼ黙殺されている状態の中では、その研究も殆どないというのが現状である。本論文では青厓の漢詩の読解を通して、国分青厓という人物像とその詩の価値を明らかにすることを目的とした。

青厓の詩集は『詩董狐』、『青厓詩存』の二冊のみである。『詩董狐』（明治書院、明治三十年三月）は青厓の評林詩集であり、その中でも明治二十一年の「東京電報」に連載されていたものと、雑誌『日本人』（政教社）に掲載された若干首を収録したものとなる。『詩董狐』は生前に青厓が出した唯一の詩集である。そして、『青厓詩存』（木下彪編、国分正胤発行、昭和五十年十月）は、青厓の死後、門下生である木下彪によって編纂された。集中には『詩董狐』が再録されているほか、明治二十二年から明治三十九年までの評林詩も収録されている。さらに、評林詩以外の伝統的な漢詩と漢文も多く収録されている。ただし、『青厓詩存』中にも収録されて

いない詩は無数に存在し、それらの作品を探すには当時の新聞・雑誌を逐一確認していく必要がある。本論文では以上の二冊をメインテキストとして扱い、適宜雑誌や新聞を参照した。

また、青厓個人の業績について言及する先行研究のうち、主要なものは以下の通りである。まず、青厓の同時代評としては、青厓と同じく日本新聞社に勤務し、漢詩の実作者でもあった正岡子規による「『詩董狐』を讀む^①」や「文學^②」といった論評が最も重要なものとなる。青厓の死後になされた研究としては、『青厓詩存』編者でもある木下彪による研究が挙げられる。特に青厓とその周辺の漢詩壇について記録した長大な連載「国分青厓と明治大正昭和の漢詩界」（『詩と友』三一八号・四〇三号、師友会、一九七六年七月・一九八三年十月）に青厓の伝記的な内容はほぼ纏まっているといつてよい。近年では、合山林太郎氏が著書『幕末・明治期における日本漢詩文の研究』（和泉書院、二〇一四年）において、明治漢詩の特徴を考察する際に、森槐南に対置されるべき存在として国分青厓を挙げ、青厓の詩風や評林詩の文学史的な価値について言及している。ただし、これらの研究の中に青厓の実作を詳細に検討、解説したものは殆どなく、未だ十分な実作の検討がなされているとは言えない。

本論では、まだ十分な解釈のなされていない青厓の実作を詳細に解釈し、たうえて、いくつかの論を試みた。

以下、論の構成である。まず、第一章「国分青厓の論詩詩」では、青厓の伝統的な漢詩について論じた。『青厓詩存』中には「論詩」と冠した漢詩が二篇収録されている。これらは「論詩詩」と呼ばれる盛唐、杜甫の時代から見られる、詩で詩を論ずるという漢詩の一ジャンルである。青厓は文章をほとんど残していない。そのため青厓の詩論を詳細に知るためには、これらの論詩詩を読み解くしかないのである。そして、青厓論詩詩の読解を通して、青厓の所属した詩派、詩壇における立場、そしてその詩論を

明らかにした。これらの論考を通し、今後青厓の漢詩（特に伝統的な漢詩）を読解・研究する上での基本的な情報を纏めた。

第一節「論詩十首」にみえる明治漢詩壇における国分青厓」では、明治三十八年（明治末年）にかけて作られた論詩詩「論詩十首」（『青厓詩存』下・巻十収録）を読解し、詩に見える「副島蒼海について」、「桂湖村について」、「当時の詩壇、詩風について」の三要素について考察した。そして、明治の漢詩壇において青厓が副島蒼海や桂湖村といった漢魏の雄渾な詩風を提唱する詩派に属していたが、当時森槐南ら清詩を首唱する詩派が漢詩壇の中心にあり、青厓らはその中心にはいらなかったこと、そして青厓は自分たちが詩壇の中心とはなりえなかった当時の現状に鬱屈たる思いを抱いていたことを確認した。

第二節「明治の「格調派」——国分青厓「論詩五首」を通して——」では、具体的には青厓はどのような詩風を持っていたのかを明らかにした。大正時代の作である「論詩五首 高島九峰 長門峽歌に次韻す」（『青厓詩存』下・巻十一に収録）を中心とした青厓の詩論に関する詩や文章を読解し、正岡子規に「格調派」と称された青厓の詩論は、近世に格調派を首唱した荻生徂徠の詩論とどのように異なるのかを分析した。そして、青厓は徂徠の擬古を重んずる詩論の方向性は認めつつも、無批判にそれを摂取したわけではなく、ともすればそれが単なる模倣剽窃に陥ってしまうというリスクをそれまでの詩史を通して理解していたこと、そして徂徠が否定していた宋詩にも一定の評価を下し、両者に広く学んだことで、より広い視野から得られた知識や思想に立脚した新たな詩論を持っていたことを指摘することができた。

第二章「国分青厓の評林詩——災害を詠む漢詩——」では評林詩について論じた。中でも青厓自身の編集が入った唯一の詩集『詩董狐』中に収められる青厓の評林詩、中でも噴火や洪水といった災害を詠んだ長編古詩の

読解を通し、評林詩の特徴を明らかにした。また、近代文学や社会学といった他の学問分野との隣接を指摘することも目的とした。

第一節「群鬼を哭す」——青厓評林詩の特色——」では、まず明治二十一年の磐梯山噴火を扱った長編古詩「群鬼を哭す」を当時の「東京電報」紙面とも比較しつつ読解した。この際、後に同じく磐梯山噴火を扱った、堤静斎（一八二六・一八九二）の古詩「磐梯山は岩城耶摩郡に在り。東隅に二峰双起す。高きを大磐梯と曰ひ、低きを小磐梯と曰ふ。明治戊子七月十五日、小磐梯噴火す。全峰皆崩る。民之が為に死する者五百数十人。惨亦た極れり。詩以て事を記す。」（『明治文学全集』62 明治漢詩文集）（筑摩書房、昭和五十八）所収）と、向山黄村（一八二六・一八九七）の七律二首「磐梯山噴火崩裂す。紀すに詩二首を以てす」と比較した。これによって「評」が存在し、『東京電報』の記事を典拠として利用し、読者の目を引くセンサーシヨナルな表現を用い、一つの詩の中に広範な話題を詠み込むという、通常の伝統的な漢詩にはあまり見られない青厓評林詩の特徴を指摘し、今後の評林詩読解の上での指針とした。

第二節「青厓評林詩と正岡子規の新体詩——「変じて海と成る」と「洪水」——」では、明治二十一年の掛斐川洪水を扱う長編古詩「変じて海と成る」と、同じく洪水を題材としている正岡子規の新体詩「洪水」（『日本人』第三十号（政教社、明治二十九年十一月）所収）を読解、比較した。まず青厓の「変じて海と成る」を読解し、第一節で確認したような評林詩の特徴をこの詩も備えている上、新聞紙面以外にも情報源が見られ、典故のある題材では典故を積極的に用いようとするという新たな特徴を抽出した。次に、子規の新体詩「洪水」について考察し、子規が新体詩で叙事・諷刺を行おうとした背景には、それまで青厓の評林詩のような漢詩が担っていた叙事・諷刺の役割を引き継ぐものとして新体詩を機能させようという意識があったことを指摘した。その上で、子規の新体詩による時事批評

の試みはわずかの間に終了し、一方で青崖の漢詩による時事批評はその後も長く支持され続けた理由には漢詩と新体詩という詩体の差があったことを述べ、さらに、明治三十年に青崖の評林詩集である『詩董狐』が出版され、それを讀んだことこそが、子規が漢詩の代わりに新体詩を以て時事批評を行わんとする試みを断念する最大の理由だった可能性を指摘した。また、この論を以て国分青崖の評林詩が、漢詩以外の近代文学とも密接に関わっていた可能性を指摘し、青崖の漢詩を研究する価値を示した。

そして、第三節「国分青崖の災害観」では磐梯山噴火と揖斐川洪水の両者に言及しつつ、明治二十年に起きた三大事件建白運動にまつわる時事を諷刺する評林詩「恩沢渥し」を中心に扱う。西洋の自然科学的な思想が既に入ってきている明治という時代に詠まれた詩であるにもかかわらず、詩中には天譴論や南宋、文天祥の「正気歌」を髣髴とさせるような、時代遅れともとれる東洋の伝統的な災害観が看取されることを指摘した。そして、その裏には科学的・合理的な思想がよしとされる近代社会の象徴的なメデアである新聞上で、古来よりの思想や典故を背景に持つ漢詩という形式でジャーナリズムに携わるといふ矛盾を抱えた状態の中で、漢詩の伝統的な役割を守りながらも時代に適応しようとする、漢詩を以てジャーナリズムに関わることへの青崖の意志があったことを指摘した。また、このような近代文化受容の過程が、明治中期の漢文脈の中で生きる日本人の中にあったことを示す資料としての価値も評林詩にあることを指摘した。

最後に「結論・今後の課題」を置き、本論文の意義と今後研究していく上での課題意識を明らかにした。

以上のように、本論は国分青崖の漢詩について、論詩詩と評林詩という二つの視点から迫り、今後青崖の漢詩を研究していく上での基礎的な情報を明らかにし、なおかつ青崖の漢詩研究を続ける意義を明らかにしたものである。

注

- (1) 越智處之助「詩董狐を讀む」新聞「日本」一八九七年三月二十二日。
- (2) 越智處之助「文學」「日本人」(政教社、明治二十九年)に連載。